

# 生命論・有機体論に基づく発達理解

—施設養育環境を展望するために—

金子 龍太郎

## 1 節 儒教とドイツ教育学に見る生命論的見地

### 1. 下からの人間学と上からの人間学

生きとし生ける人間を全体として、ありのままにとらえようとする人間科学を提唱してきた千葉（1970）は、二方向からの複眼的視点の必要性を次のように述べている。すなわち、下からの人間学は主として自然科学的な人間学であり、生物学・医学・人類学などが含まれる。それに対して、上からの人間学は人文・社会科学からの接近であり、哲学、社会学、教育学などがある。そして、全体的人間をとらえるには、下からの人間学と上からの人間学の両方が必要だという。

このように、一見矛盾した考え方の双方を必要とする関係を相補性（補完性）という。これは、電子が粒子としての性質を持つ一方で、波動の性質をも合わせ持つという矛盾を解決するために、量子物理学者ボーアが用いた概念である。各学問領域は、それぞれ方法論や役割は異なるものの、いずれも人間理解を目標に、ともに助け合い補う関係にあると千葉は主張する。ここでは、生命論・有機体論の共通基盤に立って、自然科学と人文・社会科学の統合を試み、その上で発達現象を説明し、全体的人間に関わっていく施設養育のありかたを検討していきたい。

下からの科学である自然科学において、今日まで主流を占めていた世界観は機械論的立場であった。それに対して、上からの人間学である哲学、社会学、教育学では生命論が脈々と息づいてきたようである。それは、複雑で矛盾に満ちた人間をそのままとらえようとして、生きとし生ける現実の人間が対象だったのがその理由であり、分析的な機械論に毒されずに、全体としての人間理解を深めてきたともいえよう。本論では、上からの人間理解として、まず儒教を取り上げる。人間が自然の一部、あるいは自然と一体だと考え、人間を含む生命体はお互いに関連し、絶えざる変化と発展の中にあるとする、いわゆる東洋的自然観は、儒教にその起源を求めることができる。西田哲学の流れを汲む生物学者今西（1941）の自然観も例外ではなかった。

次に、フレーベル（Fröbel, F.）の教育理論・発達理論を取り上げ、ドイツ教育学を垣間見ること、生命論との関わりを検討していきたい。フレーベルは当時の科学的な発達理論には準拠していなかったのだが、その当時の科学というのは機械論的科学であった。それゆえ、彼の発達概念には今日の機械論的見地からすれば異質性がある（三笠、1981）。しかしながら、ここ

## 金子 龍太郎

でいう生命論的見地からの科学とは同質だと考えられる。

生命論・有機体論的見地においては、人間を環境と一体としてとらえ、常に環境に働きかける一方、環境から離れた存在ではありえないとする開放系の概念が中心となるが（金子、1993c）、その考えは儒教の自然観やフレーベルの教育観と結びついていたのである。そして、人間にとって最も重要な環境は他者であり、他者との関係から切り離された人間など存在しないと考えるよい。人は単に個人としてだけでなく、社会とともにある個人なのである。システム論では、個人が一個の独立した全体であると同時に、対人システムの中では他者と関係する一要素、つまり部分になるととらえるのであるが、こうした関係性をふまえた社会的人間の認識は、儒教でいえば仁の自覚なのであり、ドイツ教育学にも同様の思想が部分的全体（Gliedganzen）という言葉の中に認められる。また、生命体が非平衡系で力動的な特性をもっており、絶えざる変化と発展の中で存在しているのととらえる点は、儒教の生成流転の思想やフレーベルの自己活動に基づく発達観と共通する。

さらに、生命論・有機体論の特徴として、単純な因果論だけで人間は行動しているわけではないことも論じられている。つまり、人間は環境により良く適応する方向で進化が決定されているのであるから、人間の先天的特性も後天的特性も、いずれも環境への適応という目的を果たすために存在している。人間の機能や行動が目的にかなっているように見えるのは、環境に適応するように進化してきたからに他ならない。

## 2. 儒教とドイツ教育学にみられる生命論・有機体論的見地

孔子は、人間性が完全に実現された状態を仁という言葉で表現し、仁とは他人に対する思いやり・愛であるとして、仁の認識や習得が人間修養の究極の目的とした。仁とは社会的人間の自覚であり、仁がすべての道徳の根源と見なされ、あらゆる徳はすべて、この最高の原理である仁から演繹されたのであった。孔子における社会的人間の自覚は、家族の一員としての自覚から、村落の一員としての自覚に拡大され、ついには人類の一員としての自覚に到達する。こうして、個人と社会を対立させる考えではなく、個人と社会の両者を両立させることをめざすことが孔子の教えといえよう（貝塚、1951）。

また、孟子は「仁は人の心なり」として、仁の根源は自我にあって、外に求める手段を必要としないことを明らかにしたのである。たとえてみると、心はまきである。仁は火である。まきは火をつけることによって働き、火はまきによってその徳をあらわすのである。しかし、まきにもよく燃えるものとしめって燃えにくいものがある。これは性がいろいろ異なっているけれど、どれも善をなすことができる点では同一であることを示している。孟子が人間の性は善だというのはそれである（貝塚、1972）。

以上、孔子や孟子が追及したのは、自己と他者の人格を尊重し、社会的人間の自覚をもった、あるべき人間の関係であった。人格の尊重こそ、人間が生命をかけて追及すべきものである（松田、1969）。さらに、人間が自然と通じるのは、自然界の万物を生みだす仁を、人間は本性として自己のうちにもっているからであると儒教は教える。

孔子と孟子の教えに遡って、儒教の本来の教えを学ぼうとした伊藤仁斎は仁を生きたものとしてとらえた。人間として生きているという感覚でとらえたのが仁斎で、機械論的な朱子学とはかなりの違いがある。仁斎はその機械論に反対し、演繹論理的な思考にあきたらなかった。たとえば、仁斎は「易経」において、天地は生々する、つまりたえず生成して発展し続けると述べている。その生成の徳が人間の心に備わったのが仁であるとしてとらえたところに仁斎の独自性が出ている（貝塚、1972）。

また、仁斎は「童子問」の中で、本性と学習との関係を論じている。それによれば、内（本性）と外（学習）とがぴったりと一つになり、内は外をたすけ、外は内を育て、お互いに相手がいなくてはすまないのであり、人の一つの身体のようなものだ。みな外から取り入れないものではなく、学習も例外ではない。動植物でたとえてみると、樹木は土でなければ生じないし、魚は水の中でなければ生きられない。しかし、樹と魚からみれば、土と水とはみな外部のものである。だが、一時も離れることはできない。人間の生存や学習に必要な情報は、外部から手に入れないものは何一つない。もし、それが外部のものであるとあって、これを捨て去れば、樹が土から離れ魚が水から出た場合のように、一日も生きることはできず、人間の活動はなりたたないと説明したのであった。そして、この考えは外部環境と一体となった生体という開放系概念そのものだといえる。

次に、仁斎によれば、他者は自己と関係のない外部の存在なのではなく、自己と他者は一体となっているという。自己と他者が肉体的に分離していても、そこには精神的なつながりが存在する。つまり、人間関係を見るとき、親しい親子、仲のよい兄弟といった血縁関係でも、すでにその身体は別々である。まして、家族外の関係はもっと疎遠である。しかし、だからといって、これを内（自己）とは関係のない外（他者）のものということとはできない。そうではなく、内外を識別せず、すべてつながりを持つという認識が仁といえるのである（貝塚、1972）。

さて、陽明学を確立した王陽明は、著書「伝習録」（格物説）のなかで、心と身体の関係について次のように論じている。「耳・目・口・鼻・四肢は身であるが、心のはたらきがなければ、どうして視たり、聴いたり、言ったり、動いたりすることができよう。しかし、心が視たり、聴いたり、言ったり、動いたりしたいと思っても、耳・目・口・鼻・四肢がなければそれができない。だから心がなければ身もないし、身がなければ心もない。身と心は一つである。ただそれが空間を充実しているところを指して身といい、それが主宰しているところを指して心といい、・・・（中略）・・・要するに同じものなのである」（岡田、1992）。そして、この立場は生命論・有機体論と共通の、心身一元論に立脚しているのである。

一方、朱子学者の貝原益軒は「大和俗訓」の中で、人間は他者と結びつこうとする本性を生まれつき持っているのであり、教えなくても小さい時から親を愛し、少し大きくなってからは仲間と関わろうとするのだという。このことからわかるように、人にはみな仁の心がある。これは人の性が善である証拠で、人が本来もって生まれついている善心をみちびき、善性にもと

金子 龍太郎

づいて、生まれついた善をあらわすことを求めるのである。

また、益軒は「和俗童子訓」のなかで、家庭外教育の重要性に触れている。それによると、子どもをいつまでも父母のそばにおいておくと、甘えたりわがままになり、怠惰な生活に流れてしまうことが多い。だから、父母の元から外に出して、教師の教えを受けさせたり、学友と関わらせると、怠惰にならず日々進歩していく。これが、古人が子を育てるのに、家におかず外に出した理由である。昔、中国で子どもが10歳になると、家から出して家族以外の人と積極的に交流させたことには、このような深い意味があったという（松田、1969）。このように益軒は、家庭内だけで、親子だけの閉ざされた関係のみでは、健全な発達をもたらされないといっているものであり、子どもの成長に伴う人間環境と生活環境の拡大がもたらす様々な対人関係、すなわち開かれた人間関係を主張している。

ところで、儒学者は子どもを甘やかして育てることを「舐犢の愛」といって、母牛が子牛を舐めて育てる状態にたとえている。舐犢の愛は、その場限りの対応でしかなく、甘やかされて育った子どもは自己中心的になって、よい人間性を身につけることなく、鳥や獣と同じようになってしまうので、強くいさめたのである。

それに対して、ドイツ語圏の国々では「サル(Affenliebe)の愛」という言葉で、サルが育てるように人間の母親が子どもを抱いて甘えを受け入れて育てることを、盲愛・溺愛としていましめてきた。サルのように、常に母親に抱かれて育てられるありさまを否定し、いましめる育児文化がドイツ語圏の国々には存在するのである。しかし、人類は霊長類に属するサルの仲間であることは歴然とした事実であり、人類と他の霊長類の連続性を否定することはできない。育児においても同様である。

サルの愛をいましめ、厳しく自立を求める育児は父性的育児ともいえ、ヨーロッパの強大な家父長制度と結びついてきたと考えられる。その影響力からは、教育界ものがれることができず、ドイツの教育界では、母親による育児の重要性が考慮されない時代が長く続いた。そうした中であって、母親の愛情深い育児を主張したのがペスタロッチであり、その弟子のフレーベルであった。母乳養育をすすめ、母親としての愛情を訴えたルソーを受けて、ペスタロッチは母子一体関係の中で、子どもの成長に絶対的価値をおき、それによって子どもの成長を保障する担い手としての母親を神的な存在へと高めていった。こうしたペスタロッチの母性愛理解については、彼の後継者であるフレーベルだけが受け継いでいったといえよう（鳥光、1986）。

このようにみると、サルの愛をいましめてきたドイツ語圏の育児文化と、それに相対するペスタロッチやフレーベルの教育思想、および儒教にみられる舐犢の愛に対する批判などは、金子（1993 b）が提唱した授抱性との関連でみると非常に興味深いものがある。

さて、フレーベルの教育思想に含まれる原理として、子どもの本能的・自発的な活動を認め、できるだけ発揮させるようにすることと、協同的・相互援助的な生活の機会を教育の場で与えることなどがあげられる。これに関しては、ルソーやペスタロッチも同様の原理を主張してきたが、フレーベルが教育現場に取り入れて発展させていったのである（三笠、1981）。

まず、フレーベルの教育思想で特徴的なのは、その生命論的認識である（Fröbel, 1826）。彼によれば、全ての人間には絶えず生成しつづけ、発展しつづけるものとしての本性がそなわっているのであり、この本性が成人よりも児童に、また児童よりも乳幼児に一層顕著に認められるという。ところが、この絶えざる生成と発展は、個人においては、先行世代の到達水準に事実上制約される。乳幼児は、将来この水準に到達する可能性を萌芽として持っているゆえに、人類の一員とみなされるのである。

そして、出生時から乳児（ドイツ語で Säugling : saugen は乳を飲む、心に吸収するという意味の動詞。それに -ling という、「-される、小さき存在」を意味する接尾語をつけて、「すべてを飲み込む存在」という意味内容を持つ言葉でもある）は多様な外界を自身の中に取り入れる存在で、母乳だけでなく、外界のあらゆる情報を五感を通して取りこむ生命体なのである。したがって両親は、乳児が母乳とともに飲みこむものを注意深く見守り、適切な環境を設定する責任がある。そして、ここに出生直後から始まる乳幼児教育の本質がある、とフレーベルはいう。

フレーベルによると、子どもに内在するものは、絶えず進展する生成物・発展物として、発達上の目的に向かって発展を続け、ある段階から次の段階へと順を追って進んでいくものとして考えられなければならないという。また、活動は生命の誕生から死にいたるまで、生きている間絶え間なく続く。もちろん、その間に休息はあるが、それは活動のための休息であって、活動の休止ではない。このように、生命のあるところに活動があり、活動のあるところに生命がある。生きるとは活動することであり、しかもその活動は自己活動である。

生命体である子どもは、外の環境から必要なものを吸収して、内にあるものを発展させており、これを自己発展という。発展はつねに外のを必要とする。外のがなければ、内のは活動し成長することができない。だから、生命の成長や発展に必要なもの、つまりそのための環境が用意されると、生命はおのずから成長し発展する。ただ、それが外にあらわれてくるためには、自分の力で環境から必要なものを吸収して、自分を育てていくことが必要なのだと言った。

次に、フレーベルの思想は、元々「現在はいっさいの過去を負うと同時に未来をそのうちにはらむ」という哲学者ライプニッツの考えからきている（荘司、1985）。過去と未来は密接に結合しているから、過去に健全な発達をしたことによって、現在も未来も健全になる可能性がある。フレーベルによれば、子どもの現在は未来との関わりで決められる一方で、過去から現在までのあり方が子どもの未来を決定するという一面も成り立つという。子どもに生じる変化を発達の観点から見れば、現在までの絶えざる変化は過去に起こった変化から因果論的に説明され、将来生じるであろう変化から目的論的に説明される。発達とは、個体に起こる変化を過去－現在－未来の時間軸の上で連続的に説明するための概念なのである。この発達の視点を持たない限り、全体的な人間形成を把握できないとフレーベルは考えた（三笠、1981）。

ところで、ルソーは子どもがいかなる時代、いかなる環境に置かれても、自力で生きていく

## 金子 龍太郎

ことができるように教育する必要性を唱えた。ルソーのこうした立場はペスタロッチやフレーベルによって継承されて発展した。フレーベルが子どもを何よりもまず一個の「部分的全体」として取り扱えといっているのはこの意味である(荘司、1985)。フレーベルによれば、子どもは一個の完全な全体であるが、しかし同時にそれは社会の一部でなければならないという。こうして個人的存在と社会的存在の両立が成り立つのである。

子どもは世界の中で一人で生活することはできない。大人に依存してはじめて生きていくことができる。その一方で、自己の自立を求める存在でもある。大人の世界に生まれてきた人間は、誕生の瞬間から生活し、成長し、学習している。そして、このことは一生を通じて行われている。すなわち、生活することは学ぶことであり、成長することも学ぶことである。

また、乳児の社会性は、まず父と母に、ついで兄弟姉妹に結びつき、ついには隣人から人類へと結びつくから、乳児の最初の微笑みは人間形成の上から見て深い意味があるとフレーベルは考えた。彼は、乳児の養育を母と子、父と子、兄姉と子、そして家庭外の人々と子の間でなされる共同事業とみなしたが、これは乳児が将来人と人との共同と連帯を尊重するようになってもらいたいという期待の反映であるという(三笠、1981)。

以上、生命論・有機体論の中心命題である、生命体の能動性や自律性、部分と全体、絶えざる生成と発展、外部の環境に対して開かれた系、および目的論的見地などは、用語は異なるが、儒教においてもドイツ教育学においても歴然と認められる。そしてここに、下からの人間学と上からの人間学との統合の可能性が伺えたのである。

## 2 節 養育システムの機能と形態

### 1. 生命体としての子ども理解と養育様式

生命体には非生命体にない何か生氣とでもいう、科学で説明できない不思議な力が存在するというのが生氣論であったが、今日においては、非生命体にない、生命体特有の性質を「流動平衡」「開放系」(Bertalanffy、1949)、あるいは「非平衡系」「散逸構造」(Prigogine、1993)という概念によって、物理・生物学的に説明する有機体論や生命論が主張されるにいたった。

非平衡で流動的なものは、完全な平衡状態にならないのであるから、そこに力動的なリズム現象が生じる。もちろん一定の範囲内での変動のみ許されているから、負のフィードバックが働き、ホメオスタシスが成り立つ。こうして、生命体を力動的、かつ規則的なものとしてとらえることは、今日の生命理解にとって非常に重要であり、このように生命体の変動しつつも、時間軸上で一定の規則性、すなわち構造を有していることを時間構造と称する。この時間構造を学際的に研究している「時間生物学」の分野においては、生命現象の3つの柱を提唱している。それは、①加齢(発達)という一方向的で不可逆的な現象、②生体リズムのような可逆的で比較的短い時間軸上の現象、そして③ホメオスタシスである(佐々木・千葉、1978)。前二者が生物を時間的に変動させるのに対して、ホメオスタシスは変動させない性質といえ、これらの性質が織りなすのが生命現象であるといえよう。

また、物理的時間は時計による計時で示されるように、均一で絶対的測度であるのに対して、生物の時間は均一ではなく、あくまで相対的なものである（渡辺、1974）。乳幼児の各種生理現象は、まさにこの現象であり、たとえば排尿の自立時期は歴年齢で決められるものでもなく（金子、1990）、起床と就寝の時刻（金子、1991）や排便の時刻（金子、1993 a）、そして授乳間隔（金子、1992 a）も時計の示す時刻で定められるものではなかった。そこには、発達差や個人差、および日による変動・ゆらぎが存在すると同時に、一定の規則性が存在する。

こうした事実に対して、たとえば、「平均値からみて、2歳までには排泄の自立ができる」とか、「3時間間隔で定時の授乳を行う」という養育のあり方は、生物的時間上の現象を物理的時間の元に従属させることに他ならない。つまり、時計の計時に従ってなされる集団養育のあり方は、生物的時間や生命の本質を無視したものといえよう。なによりも、個人差・ゆらぎ・発達の变化という、生物的時間上の特性を正しく認識しなければ、発達をはじめとする様々な生命現象を見誤る危険性につながるのである。

次に、生命体の時々刻々変動する性質は常に環境と一体となって進行する。これは人間といえども例外ではなく、環境から切り離された一個人は存在しえない。なによりも、人間にとって他の人間が最も強い影響を与える環境要素であり、他者から切り離された人間など考えられない。個人的存在、かつ社会的存在の両面を持っているのが人間なのである。

生きとし生ける生命体である家族成員は、お互いに常に関わる中で年月を重ねていき、その様相が時々刻々変動していく。そして、異なる性で異なる年齢の成員が、それぞれの生涯で変容していく中であって、永続的な心の絆が保持されている状態を有機的人間関係と表す。その上で、そうした成員で構成されている生活の場が、子どもの発達に必要な機能を保持している状態を「家庭的養育」と称した。それに対して、施設で一般的に見られるような、同年齢で一時的な集団から成り立つ体制を無機的あるいは施設の養育と表現する。ただし、いかに血縁関係にある成員だけからなる家庭であっても、子どもの養育に必要な不可欠な機能を満足していなければ、形態上は家庭であっても機能的には家庭でないことになり、「家庭的養育」といえないのである。

有機的人間関係の特徴は、異質な成員から成り立っており、しかも変動しつつも永続的な心の絆を有し、生涯発達を包含している点にある。生物の基本的特性である、個体の維持と種の維持の両面を保障するものともいえる。後者の種の維持に関しては、発達諸科学の中で考察されることはあまりなかったのであるが、人間の全面発達をもたらすためには欠かすことのできないものである。種の維持においては、異なる性（夫と妻）と、異なる年齢（親と子）の家族成員間で展開する継続的関わりが不可欠になってくる。そこでは異性との共同行為により、新しい生命を誕生させ育むわけであるが、それは20年におよぶ長い時間を要する。したがって、異質な他者と長期間関わる社会的能力を習得していなければ、次世代を生み育成することは不可能である。

いわゆる「施設二世」という言葉で表されるように、施設で育った人がわが子を自分で育て

ることができずに、再び施設に預けざるをえないという、世代を超えた悪影響の循環現象は、集団の同質性を強調した養育体制の元で、異質な仲間と関わる経験が乏しいまま成人してしまうという体制、言い換えれば、次世代の育成に不可欠な、異質な他者との対人関係能力の習得を考慮しない施設の養育体制が必然的に生み出した産物ともいえよう。

施設養護の最終目的は、家族に代わって子どもたちを自立した社会人に育成し、彼らが結婚し育児を全うするという、次世代育成能力を習得させることといえよう。その際、特定の養育者との継続したアタッチメントに加えて、養育者以外の人々との開かれた人間関係を形成していくことが非常に重要な意味を持つのである。

未婚の母、両親の離婚・死亡・病気といった様々な理由で産みの親と離れてしまい、アタッチメント関係を結べない施設児に対して、乳幼児期の母性的養育の欠如による様々な問題を解消していく臨床的関わりが施設に求められる。SOS 子どもの村退所児の追跡調査から明らかになったこととして、施設職員が親代わりとなり、密接で継続した人間関係を確保できる体制の下で、幼児期から学童期、そして青年期を通じて養護した結果、かつての施設児たちの多くは様々な発達障害を克服し、健全な対人関係能力を獲得して社会人として生きてきた (Raithel & Wollensack, 1980)。

こうした追跡調査からは、実の親以外の様々な人との関わり、すなわち対人ネットワークの重要性が浮かび上がってくる。それらの人間は、兄や姉、あるいは養親、そして施設職員であり、現在の家族なのである。いうまでもなく、乳幼児期には養育者(母親)を「母港」や「心の安全基地」と認識でき、そこを拠点として外界を探索し情報を得ていくことは不可欠であるが、それに加えて、その後、男性と女性として人間性の成熟を満たして結婚生活に入り、親として次世代を育成していくには、子ども時代からの親による安全と保護の状態から脱却して、精神的絆を保ちつつも、親から離れることが必要なのである。そして、その過程でかつての「船」(子ども)が「母港」や「心の安全基地」(親)になっていく(金子、1995)。

施設追跡研究が示唆することは、施設職員が実の親に代わって、施設児との間に新たなアタッチメントを形成し、それを基盤として、様々な人間との関わりを拡大し、維持していく営みを10年、20年と続けていくことの必要性だった。そして、個体の維持と種の維持の両方がなされていく過程では、養育上の親和的側面と分離的側面の両方が発達上で力動的に変動しつつも、バランスを保っていることが大切なのであり、それは家庭においても施設においても共通することなのである。

## 2. 総合的な発達理解に向けて

発達現象は生体と環境との絶えざる相互作用の元に進行していく。したがって、生体と環境を一つの系ととらえ、系内の要素間で相互作用することが生命体の特性だと説明する生命論や有機体論に基づいたシステム論が発達現象の理解を深めていく(金子、1993 b)。

そのため、発達理解においては、まず第一に機械論から生命論・有機体論へのパラダイム・シフトが求められる。すなわち、現代物理学(量子力学、サイバネティクス、相対性理論)や

現代生物学（分子生物学、生物物理学、動物行動学、霊長類学、進化学）をふまえて、生命体（人間）を理解する科学哲学（たとえば、ベルタランフィ、渡辺慧、及びプリゴジン）に基づく人間観への移行である。そこでは、主観的で目的論の世界、さらには心身一元論、全体論、力動性、システムといった世界が広がっている。

人間の新生児は養育者（主として母親）がいないと生存できず、養育者との間でシステムを形成し、システム内での様々な作用を前提として生まれてくる。そして、ある生得的特性の発現時期に、重要な環境要素である養育者との相互作用の機会を保障する機構が存在するのであり、乳児と養育者を結合させるアタッチメントがその一翼を担っている。しかし、その後は幼児期、児童期になるにつれて、母子が分離して、新たな人間関係を友人、恋人、そして配偶者と形成することにより、はじめて正常に進行する機構がある。種の維持・次世代育成能力がそれである。このように、発達上の動的変化、つまり船（子）が母港（養育者）になる過程を説明できるものとして、個体発生上も外界に対して開かれていて、当初の母子だけの関わりから、次々に新たな他者とアタッチメントシステムを形成していくことを示す開放系の概念は重要である。

その際の変化は、分離に向かう子どもと養育者の両方で生じ、養育者と子どもが一体となったシステムの変容という理解を行う。子どもの移動能力が発達し、探索欲求が増大していき、母親から離れて外界を探索することによって分離が進行するであろうし、母親の側でも、離乳によって様々な生理的な変化が生じて、次子を妊娠して出産する準備が始まることによって、長子を拒否することもでてこよう。いずれにしても、子どもと母親の両方で、身体的、生理的、行動的、そして心理的な様々なレベルでの変化が養育行動上のダイナミクスを生み出しているのである。

第二としては、人類は生命体として、哺乳類として、そして霊長類としての様々な特性をあわせ持つ生物だという認識である。つまり、生体の定義として開放系である人類は、それと同時に、子どもがある程度育ったのちに出産する胎性の動物で、母乳でわが子を育てる哺乳類であり、かつ母親に抱きついたり抱かれたりする授乳の特性を持つ霊長類なのである（金子、1993 a）。

しかしながら、心理学の歴史においては、こうした複合的な理解はなされてこなかった。一例をあげると、乳児が養育者に対して強い情緒的結びつきを形成する理由として、行動主義者たちは食欲などの生理的欲求の充足が一次的動因で、母親との結びつきは二次的動因だと考えた。それに対して、ボウルビィやハーローらは、母親との身体的結びつきこそ一次的動因とする理論を提唱した。しかし、彼らは生理的動因には触れていない。いずれも二者択一的理解にとどまっている。それに対して、ここでは「食欲などの生理的欲求の充足は一次的動因で、同時に母親との身体的結びつきも一次的動因だ」ととらえるのである。

ハーロー（Harlow、1971）によるアカゲザルの母子隔離実験の解釈も、ミルクよりも柔らかさを子ザルが求める、という二者択一的理解ではなく、ミルクも柔らかさも両方求めていたと

理解すべきだと考える。ミルクよりも柔らかさをもたらす代理母親のほうに長時間しがみついているといっても、ミルクが不必要だというわけではない。ミルクは哺乳類として、そして柔らかい対象に抱きつくのは授抱性の霊長類としての特性で、子ザルにとってはどちらも不可欠だからである。同様に、人類も哺乳類であり霊長類であるから、授乳も柔らかい対象に抱かれることもどちらも必要で、両方存在しないと生存はおぼつかない。

もちろん、人類は他の動物とは大きく異なる様々な特性を持っており、それにより個体発生上も環境の影響を強く受けるだけでなく、周囲の環境を大幅に変えていく存在であるから、他の動物に見られない特徴を十分認識する必要がある。ここでは、開放系・授乳・授抱の三つの特性について論じていく。

まず、人類は他の動物には類を見ないほど、個体発生上の可塑性や柔軟性を有しており、自由度の高い生物だといえよう。さらに、それを人間社会や文化の変容や多様性が助長している。そこで、開放系としてあらゆる生命体は共通特性を持つが、特に人類は個体発生上も周囲の環境に対して開かれており、周囲の環境を自ら変え、環境から影響を受けつづけることによって自己を形成していく独特な存在といえよう。

次に、哺乳類として授乳という特性の必要性はなくなるものの、人類の文化や文明の進展により、産みの母親以外の人物が、乳汁しか摂取しない乳児を育てることが可能となった。かつては、それは乳母に限られていたが、今日では人工栄養の発明により、女性にとどまらず、男性であっても乳児を育てることが可能となって、授乳の担い手とその形態は、他の哺乳類に見られない多様性をもつに至った。

さらに、子どもが養育者に抱かれたり、抱きついたりして育てられる授抱性に関しては、他の霊長類にくらべて、人類の新生児の把握能力や運動能力が非常に低下した中であって、表面上は養育者に抱かれて育てられることが少なくなってきた。特に、文明が進んだ国々ではそうである。しかしながら、それを補うように、腰布や背負いヒモという用具を使用することで、乳児の抱きつく能力の低下を補っている。また乳児自体にも、あお向けに寝かされた時に、養育者の存在を視覚や聴覚でとらえる定位能力や、離れている養育者を引きつけるための泣きや微笑みといった信号を出す能力が非常に優れていて、養育者と結びつく機構を持っているのである。

他の霊長類のように、常に養育者と密着して過ごせない代わりに、視覚や聴覚といった遠感覚器によって、心理的に結びついている存在が人類なのである。遠感覚機能がさらに加わった授抱性生物だともいえよう。そして、人類の乳児は他の霊長類に見られない高度なコミュニケーション能力を持つに至った。こうして、乳児と養育者が身体的に分離した状態であっても、精神的には分離していないことによる、発達障害を回避する機構が備わっているのである。

第三の視点は、個体レベルと種レベルを両立させた発達理解である。発達の過程で子どもは個体として自立していくが、それと同時に、将来異性と関わり、協同して子どもを産み育てるという、種を維持させる能力、次世代を育成する能力をも発達させていく。したがって、発達

とは、個体としての自立と種成員との協同という二つの機能を同時に行う、いいかえれば個体の維持と種の維持を両立させていく過程といえよう。発達理解は個体レベルにとどまっていたりは深まらず、種レベルの現象を合わせてとらえることで進むのだと主張したい。

子孫を維持する能力、つまり次世代育成能力を視野に入れると、乳幼児期の養育者とのアタッチメントの理解は深まっていく。その際、ウィニコット (Winnicott, D. W.) の「ほぼ良い母親」(Good enough mother) の概念が参考となる (Winnicott, 1965)。彼によれば、養育を十分に果たし、幼児が成長するにしたいが、徐々に関与の度合いを減じていける母親が望ましいというのである。また、モリス (Morris, D.) は、母親に対して乳児は「しっかり抱いて」、幼児は「下に降ろして」、そして青年は「一人にしておいて」と要求すると表現している (Morris, 1971)。つまり、親離れ・子離れを前提とした養育システムが存在するのであり、このことが次世代を育成する能力を形成する上で不可欠な点なのである。

アタッチメントという用語には、結合・絆といった親和的要素を強調する側面がついてまわっている。それは、アタッチメントという用語自体が、親和的要素しか持ち合わせていないからである。それゆえ、これまでは子どもが親から自立していく過程を正しく示すことができなかった。子どもの対人発達にはアタッチメント要素に加えて、デタッチメント、つまり自立・分離の要素が同時に含まれているため、アタッチメントとデタッチメントの両方を包含する視点が求められるのである (根ヶ山・鈴木、1995)。

乳幼児期には特定の養育者が存在しなくてはならない。それは、世界に開かれる第一歩が養育者を通してなされるからである。養育者という具体的な個人に対するイメージを通して、抽象的な種成員を認識する際の原型ができあがっていく。と同時に、その後確固たる種成員のイメージを確立するためには、家族、仲間、異性など様々な他者との関わりが求められる。こうして、養育者という個人から始まる開かれた人間関係は、全人類 (種社会) へと広がっていく。

### 3 節 施設に暮らす子どもの発達を保障するために

#### 1. 人間環境と生活環境の保障：家庭と村

家庭養育上の諸問題のために、施設で生活を送らざるをえず、家庭復帰が望めない子どもにとって、養子・里子として新しい両親と家庭が得られることが最も望ましいことであろうが、養子縁組や里親の数は限定される。さらに、養子・里子に行っても養い親とうまくいかずに、再び施設に戻る場合がある。そうした子どものための最後の拠り所として児童施設は存在する。また、各種専門職員の元で、養い親では対処できない様々な問題に取り組めるところに施設の意義があるといえよう。

ここでは、実親との心の絆が形成されておらず、家庭で生活するのが望ましくない要養護児を受け入れ、乳幼児期から青年期までの様々な年齢の子どもたちが長期に在籍でき、かつ健全な発達を保障できる施設のあり方を検討していく。短期間入所し、将来の家庭復帰が期待される場合は、ファミリー・グループ・ホームの形態が考えられようが、本論では、乳幼児期からの生

涯発達を視点に入れた考察を行うので、ファミリー・グループ・ホームには言及しない。そして、理論的検討に耐えうる家庭的養育の場という視点に立って、現在、世界のなかで最も成果を上げていると思われる、金子（1992 b）が紹介したオーストラリアで発祥した児童施設、SOS 子どもの村の実例（Gmeiner、1985）をモデルとして、理想的な形態を検討していきたい。

開放系概念から引き出された発達の機能面、人間環境、そして生活環境という3側面モデル（金子、1993 b）に基づくと、まず乳児期には特定の間と養育系を形成するための人間環境と生活環境が家庭内で確保される必要がある。乳児期の発達保障のためには、乳児と一体となって養育系を形成する養育者の存在は欠くことができない。このことは、家族から離れ施設で生活せざるをえない子どもたちにおいても同様である。乳幼児期に母親とのあいだにアタッチメント形成ができないまま施設に受け入れた子どもたちには、何よりもまず、母親代わりの存在が求められる。母親代わりの養育者に対する基本的な信頼関係を施設で満足することによって、新たなアタッチメントが形成され、発達の原動力となるのである。そのため、母親代わりの職員が子どもと生活を共にし、この人なら信頼できるという安心感を子どもに与え、両者の絆を形成すること、これが母親代わりの職員の役目であり、施設養育においても根本をなす。そして、心身の保護を特に必要とする乳児期の間は、外部の人々と生活の場を隔てることが可能な、一戸建ての家屋か集合住宅に暮らすことが望ましい。

次に、1歳前後で歩行が可能となり、生活の場が室内だけから室外に広がり始めた時期には、家と連続した庭の存在が重要となる。庭という緩衝地帯があることで、家庭外の新しい世界に支障なく踏み出せるのである。家庭という熟語が家と庭という漢字から成り立っているのは、意味のないことではない。隣の家につながっていく庭の存在は、子どもたちの生活環境の拡がりのためには不可欠となる。庭は子どもたちの遊び場、社交の場、あるいは洗濯物干しなどの生活の場であり、野菜や果樹を栽培する生産の場でもある。

続いて、幼児期以降、児童期、思春期、青年期、その後の成人期への成長に対応して、家族以外の人間関係、つまり友人、異性、職場の人間、そして新しい家庭を築いてからは、配偶者や子どもという人間環境の拡大がある。と同時に、その人間関係が存在する場所として、隣近所、保育所・幼稚園、学校、職場、さらに新しい家庭が生活環境として拡がっていく。こうした人間の生涯発達を保障するためには、家庭という生活単位を基本として、同時にそれを包括する各種生活共同体をも踏まえた視点が求められよう。

代理母親の元で生活を共にする兄弟姉妹としては、乳児から青年期までの様々な年齢で、男女双方の仲間たちとなる。その人数は最大8名までで、1人の女性が世話できる人数にとどめる。一軒の家で生活を共にする兄弟姉妹関係の仲間との関わりにより、有機的で豊かな人間関係がもたらされる。その中で、年少児は年長児の行うことを見て模倣をして、様々な事柄を学習する。一方、年長児は年少児をかわいがったり、面倒を見たりする。また、男子と女子が共同で生活することで健全な性意識が育ち、異性との付き合い方を学んでいく。

そして、18歳頃になると自立のための家に移り、社会的な自立をめざし、異性と交際を重ねていくことで、将来新しい家庭を築く準備を行うのである。高校を卒業した18歳から20代にかけての青年たちで、大学生の場合や就職していても、まだ一人前になっていない若者の自立を援助する施設の存在も重要である。精神的にまだ未熟で不安定な時期に、一人で社会に送り出し、今までの生活の場から切り離してしまうことは、健全な社会生活への仲間入りを妨げてしまうことになりかねない。施設養育の最終目的は社会人としての自立であり、彼らが就職し、家庭を持ち、子どもを自らの手で育てることができてはじめて、その目的が達成されるのであり、それまでの20年以上の歳月を見守る場所が求められる。

生活共同体のモデルとしては、かつてわが国の田舎に多く見られた、数人の子どもを抱えた家族の住む家が、適度な間隔を置いて有機的に集合した村落があげられる。そこでは、家庭の中で父母や異年齢の兄弟姉妹関係が確保でき、同年齢や異年齢の他家の子どもとの触れ合いができ、対人関係も断層なく広がっていく。と同時に、村という生活共同体の中で隣近所の住人、家並み、通学路、その他すべてが子どもたちの育つ家を暖かく包んでいる。その中で、子どもの生活の場は屋内から庭へ、隣近所から村内、さらに学校へと広がっていく。こうした生活環境の拡大がスムーズになしとげられる場所は、発達しつつある子どもにとって不可欠なのである。そうした場所をすべて含むのが村である。

村落をモデルにした施設を考えると、家庭に恵まれない子どもに再び「家庭」のみならず、「故郷」を与えることにもなろう。故郷としての村には、自分を育ててくれた人と自分が育った家がいつまでも残っていて、成人した後でも帰省できる母港となる。何歳になっても、村を出ていき都会で生活するようになって、盆や正月に帰省できる場所、なつかしい家やなつかしい人々が待っている場所が、身寄りのない施設児だからこそ必要なのではないだろうか。そして、こうした故郷の存在は生涯発達を視野にいれると一層重要になるのである。

以上、乳幼児期の養育系を保障する「家庭」に加えて、発達と共に拡大していく人間環境と生活環境を含んだ場としての「生活共同体（村）」と「村内の人々」の並立によって、施設で育つ様々な子どもたちの発達が保障できる家庭的な養育形態が成り立つ。このあり方は、実は児童福祉の世界で古今東西試みられてきた形態であり、SOS 子どもの村を筆頭にして、小数派ながらも成果をあげてきている。人間行動学者のハッセンシュタイン (Hassenstein, B.) は、子どもの村の理念と実践を非常に高く評価しており、養育者と子どもとの個別の絆を形成することを重視している点をはじめとして、現在最高の養護形態だと述べている (Hassenstein, 1987)。なによりも、ボウルビィ (Bowlby, 1951) らがすでに1950年代の前半に提言していたのは、こうした子どもの村の形態なのだった。そうした実践を本論では、生命論・有機体論の立場から、自然科学と人文・社会科学の両面から理論的に検討してきた。そして、施設における家庭的養育の視点から、今後のさらなる展開に向かう根拠を体系的にまとめたことになる。

最後に、これまでペスタロッチや石井十次をはじめとして、古今東西の福祉事業家が協力者や後継者の不在により、事業の失敗や消滅に直面してきた。その主たる原因は、福祉や教育に

金子 龍太郎

携わる職員の養成が困難であったことがあげられる。どんなに福祉の理念が崇高であっても、それを実践する人間が育っていなければ、福祉は成り立たなかった。まさに「福祉は人なり」なのである。施設の子どもにとって、もっとも重要な環境要因が施設職員なのである。SOS 子どもの村が成功してきた大きな理由は、2年間にわたって施設養護の知識と実践技術を習得させる職員養成学校を有しているところにある。

今後は、家庭に恵まれない子どもたちを親に代わって育て、子どもの全面発達を援助していく職員をどのように養成していくかを具体的に検討しながら、本論での様々な視点をわが国の理想的な施設実現へ向けて集成させることがこれからの課題なのである。

引用文献

- Bertalanffy, L. v. 1949 Das Biologische Weltbild I-Die Stellung des Lebens in Natur und Wissenschaft - A. Francke AG. Verlag 長野敬・飯島衛 (訳) 1954 生命 - 有機体論の考察 - みすず書房
- Bowlby, J. 1951 Maternal Care and Mental Health. W.H.O. 黒田実郎 (訳) 1962 乳幼児の精神衛生. 岩崎書店
- 千葉康則 1970 行動科学とは何か. 日本放送出版協会
- Froebel, F. 1826 Die Menschenerziehung. 小原國芳 (訳) 1976 フレーベル全集 第二巻 人の教育. 玉川大学出版部
- Gmeiner, H. 1985 Die SOS-Kinderdörfer. SOS-Kinderdorf Verlag Innsbruck. SOS キンダードルフジャパン (訳) 1990 SOS キンダードルフ.
- Harlow, H. F. 1971 Learning to Love. Albion Publishing 浜田寿美男 (訳) 1978 愛のなりたち. ミネルヴァ書房
- Hassenstein, B. 1987 Verhaltensbiologie des Kindes. Piper.
- 今西錦司 1941 生物の世界. 弘文堂
- 貝塚茂樹 1951 孔子. 岩波書店
- 貝塚茂樹 (編) 1972 日本の名著13「伊藤仁斎」. 中央公論社
- 金子龍太郎 1990 乳児院入所児の排尿自立過程上の個人差. 小児保健研究, 49, 511-515.
- 金子龍太郎 1991 児童入所施設幼児の睡眠習慣とその個人差. 小児保健研究, 50, 597-601.
- 金子龍太郎 1992 a 自律授乳条件下における哺乳リズムの個人差と発達的变化. 日本心理学会第56回大会発表論文集, 431.
- 金子龍太郎 1992 b 家庭的養育の理念に基づく児童施設の実践例 -SOS 子どもの村-. 北陸学院短期大学紀要, 24, 49-66.
- 金子龍太郎 1993 a 児童入所施設幼児の排便リズムの個人差と発達的变化 -集団養育における排便自立介助への提言-. 小児保健研究, 52, 593-598.
- 金子龍太郎 1993 b 施設入所児の発達保障を理論づける開放系と授抱性の概念. 北陸学院短期大学紀要, 25, 29-54.
- 金子龍太郎 1995 施設養育と子別れ. 根ヶ山光一・鈴木昌夫 (編) 子別れの心理学, 218-232. 福村出版
- 松田道雄 (編) 1969 日本の名著14「貝原益軒」. 中央公論社
- 三笠乙彦 1981 フレーベル「人間の教育」. 藤永保・三笠乙彦 (編) 人間の教育を考える 幼児の教育, 67-89. 講談社
- Morris, D. 1971 Intimate Behaviour. Jonathan Cape Ltd. 石川弘義 (訳) 1974 ふれあい - 愛のコ

生命論・有機体論に基づく発達理解

コミュニケーション。平凡社

根ヶ山光一・鈴木昌夫（編） 1995 子別れの心理学。福村出版

岡田猛彦 1992 シリーズ 陽明学 3 王陽明（下）。明德出版社

Prigogine, I. 1993 生命論 - 自己組織化のパラダイム -。日本総合研究所（編） 生命論パラダイムの時代, 67-110。ダイヤモンド社

Raithel, M., & Wollensack, H. 1980 Ehemalige Kinderdorkinder Heute. Sozialpädagogische Institut des Deutschen SOS-Kinderdorf e.v.

佐々木隆・千葉喜彦 1978 時間生物学。朝倉書店

荘司雅子 1985 幼児教育学。柳原書店

鳥光美緒子 1986 近代教育学の中の母性 - ペスタロッチにおける母・子ども・家庭 -。小林登・小嶋謙四郎・原ひろ子・宮澤康人（編） 新しい子ども学 3 子どもとは, 145-164。海鳴社

渡辺 慧 1974 時。河出書房新社